

『虎明本狂言集』における「と思ふ」と「と存ず」 ： 『日本語歴史コーパス』を利用して

著者	渡辺 由貴
雑誌名	国立国語研究所論集
号	9
ページ	237-254
発行年	2015-07
URL	http://doi.org/10.15084/00000470

『虎明本狂言集』における「と思ふ」と「と存ず」

——『日本語歴史コーパス』を利用して——

渡辺由貴

国立国語研究所 コーパス開発センター 非常勤研究員

要旨

本稿では、『虎明本狂言集』における動詞「と思ふ」および「と存ず」の使用状況について、主として話者や場面の側面から、国立国語研究所の『日本語歴史コーパス 室町時代編』の一部として公開されている『虎明本狂言集』のデータを利用して調査した。

『虎明本狂言集』では基本的に話手の立場が聞手と同等以下の場合には「と存ず」が、話手の立場が聞手と同等以上の場合には「と思ふ」が用いられる。これは中世軍記物語と同様の傾向であるが、『虎明本狂言集』では目上の聞手に対しても「候」を伴わない「と存ず」の形が用いられる点異なる。また、観客への配慮表現として、名乗りや独白等の場面においても「と存ず」が用いられることが多い。男性話者に比べ女性話者は「と思ふ」を使用する傾向があり、これも『虎明本狂言集』における「と思う」の特徴といえる*。

キーワード：「と思う」、 「と存ずる」、 思考動詞、 待遇表現、 中世語

1. はじめに

動詞「存ず」は、「思ふ」の謙譲語、あるいはあらたまり語とされる。渡辺（2011）において、『平家物語』『保元物語』『太平記』『義経記』等の中世軍記物語やキリシタン資料の『天草版平家物語』では、基本的に文末表現「と存ず」は話手が聞手に対し、主従関係や父子関係等の観点から見て同等以下の立場の時に、「と思ふ」は話手が聞手と同等以上の立場の時に使用されること、逆にいえば、「と存ず」は目下の聞手に対しては使われにくく、「と思ふ」は目上の聞手に対しては使われにくいことを確認した。近代以降、推量表現に準ずる「と思う」が多く用いられるようになる等、文末思考動詞の発達が見られるが（渡辺 2007 等）、それ以前の時代に思考動詞による表現が存在していなかったわけではなく、中世語においても「と思ふ」の他「と存ず」等、思考動詞を用いた表現が多用されていたのである。ただし、中世説話において同様の調査をしたところ、「と存ず」はほぼ見られず、そのためか話手より聞手の立場が高い場合でも「と思う」が使われている例がある等、資料によって「と思ふ」「と存ず」の使用状況は異なっていた。

ところで、同じく中世語の資料である『虎明本狂言集』にも軍記物語と同様に「と思ふ」「と存ず」が多く用いられているが、渡辺（2011）ではその詳細を論じることができなかった。狂言の様々な話者による対話、名乗りや独白も含めた多様な場面の中で、両表現の使用の選択にあたり、話

* 本稿は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「通時コーパスの設計」（プロジェクトリーダー：田中牧郎）による成果の一部である。また、第6回コーパス日本語学ワークショップ（2014年9月）での「『虎明本狂言集』における「思ふ」と「存ず」—『虎明本狂言集』のコーパスデータを利用して—」の発表内容をまとめ、大幅に加筆修正したものである。

者の属性はどのように関与しているのであろうか。他の中世語資料における状況と異なる傾向が見られるのであろうか、あるいは、共通するとすればどのような特徴が見られるだろうか。

なお、『虎明本狂言集』における「と思ふ」類の表現を扱った先行研究に村上(1993)や李(2006)がある。村上(1993)は、定型性の強い一曲の発端部における「ばや」(「ばやと存ずる」)に注目し、狂言の構成や類の面から整理したものである。また李(2006)は、特に名乗りの場面で多用される推量・意志の助動詞「ウ」と「ウと思う」(「ウと存ずる」)との間の、意味的・機能的相違に焦点を当てたものである。また、穂田(1975)は、狂言等の資料における待遇表現としての「存ず」について述べている。

本稿ではこれらの研究をふまえ、話者や場面の情報に着目しつつ、総合的・数量的に『虎明本狂言集』における「と思ふ」「と存ず」両表現について検討したい。

そこで調査にあたっては、国立国語研究所において筆者が構築に携わる、『虎明本狂言集』のコーパスデータを利用する。この『虎明本狂言集』のコーパスデータは、大塚編(2006)を底本とするもので、『日本語歴史コーパス』の一部として2015年3月に公開された。このコーパスデータには、形態論情報や、話者情報、文体情報等が、全ての語に対して付されており、『虎明本狂言集』における言語の網羅的な分析を行うのに適している(なお本調査においては1月5日時点の公開前データを用いている)。本コーパスデータの話者情報については、本文内に話者が示されていない場合にも可能な限り付与されており(小林・市村2013: 328)、本稿ではその情報を利用して考察を行う。なお、底本における両動詞の表記は「思ふ」「存ず」であるが、本コーパスの語彙素の表記にあわせ、以降「思う」「存ずる」と現代語の表記で示す。

2. 考察

2.1 「と思う」「と存ずる」の使用状況の概略

表1 『虎明本狂言集』において用いられる動詞(上位30位)

	語彙素	品詞	粗頻度		語彙素	品詞	粗頻度
1	御座る	動詞-非自立可能	3380	16	聞く	動詞-一般	585
2	言う	動詞-一般	3308	17	行く	動詞-非自立可能	578
3	為る	動詞-非自立可能	2201	18	思う	動詞-一般	522
4	有る	動詞-非自立可能	2017	19	出でる	動詞-一般	514
5	申す	動詞-非自立可能	1491	20	居る	動詞-非自立可能	453
6	参る	動詞-非自立可能	1478	21	来る	動詞-非自立可能	446
7	候う	動詞-非自立可能	1141	22	因る	動詞-一般	379
8	致す	動詞-非自立可能	903	23	置く	動詞-非自立可能	374
9	取る	動詞-一般	785	24	仰せる	動詞-一般	354
10	成る	動詞-非自立可能	784	25	遣る	動詞-非自立可能	350
11	参らせる	動詞-非自立可能	741	26	急ぐ	動詞-一般	334
12	存ずる	動詞-一般	731	27	下される	動詞-非自立可能	289
13	見る	動詞-非自立可能	662	28	知る	動詞-一般	283
14	然る	動詞-一般	660	29	畏まる	動詞-一般	267
15	持つ	動詞-一般	617	30	掛ける	動詞-非自立可能	255

『虎明本狂言集』における「と思う」「と存ずる」の考察を行う前に、動詞「思う」「存ずる」自体の使用状況の概略を確認しておきたい。表1に『虎明本狂言集』のコーパスデータにおいて用いられている動詞のうち、粗頻度の上位30位の語を示す。表1を見ると、「存ずる」が12位、「思う」が18位となっている。なお、表1のうち補助動詞としての用法がある動詞については品詞が「動詞-非自立可能」となっているが、これらを除くと、「存ずる」が3位、「思う」が7位となり、『虎明本狂言集』の中でどちらの動詞も多く用いられていることがわかる。

また、表2に、語彙素「思う」「存ずる」の用例数を〔本文種別〕別に示す。「思う」は522例中487例（約93%）が、「存ずる」は731例中713例（約98%）が「会話」での例である。

表2 「思う」「存ずる」の〔本文種別〕別用例数

語	ト書き	引用 -会話指示	引用 -典拠	引用 -典拠・和歌	会話	注釈	計
思う	5	24	1	1	487	4	522
存ずる	1	15			713	2	731
計	6	39	1	1	1200	6	1253

*「引用-会話指示」は、「又次第にてすれば、【やどへ帰りつゝ】と云て、」のように、ト書きの中に示された台詞を表わす。「引用-典拠」は、「古本にはく、【三面の大こくを、…】」のように、古典等の文からの引用部分を表わす。

また、表1の「動詞-一般」のうち、粗頻度が上位の語について、同様に「会話」の用例の比率を見た結果、「言う」が約46%、「取る」が約73%、「然る」が約92%（ただし、いずれも「さらば」「さりながら」「さるほどに」等の接続詞的な用例）、「持つ」が約79%、「聞く」が約88%と、動詞により差があり、舞台上で視覚的に確認できる何らかの動作を行う「言う」「取る」「持つ」等は、比較的ト書きでの用例も見られるのに対し、実際の行動が動きとして見えにくい「存ずる」「思う」等の思考動詞や「聞く」等は、会話文での用例の比率が高くなっている。

さて、ト格をとる「と思う」「と存ずる」についても同様の傾向が見られるだろうか。現代語において、「と思う」は一種のモダリティ表現として用いられることもあり、また、動詞「存ずる」には、次のように、「思う」ではなく「知る」の謙譲語としての用例が含まれている。

(1) 「某をえしらぬか」「いや何ともぞんぜぬ」 (福の神上:14)

このように、ト格の有無により、「思う」「存ずる」は別の性質を示すことがあるが、動詞「思う」「存ずる」と、ト格をとる「と思う」「と存ずる」とで、文体面での差異はあるのだろうか。表3に、「と思う」「と存ずる」について、表2と同様の調査を行った結果を示す。「と思う」は363例中337例（約93%）、「と存ずる」は531例中523例（約98%）が「会話」の用例となっており、表2の結果と同様、両表現とも会話文での用例が主となっていることがわかる。なお、動詞「思う」のうち、ト格をとる用例は約70%、同様に動詞「存ずる」のうち、ト格をとる用例は約73%であった。以降、ト格をとる「と思う」「と存ずる」の形式を中心に考察していく。

表3 「と思う」「と存ずる」の〔本文種別〕別用例数

語	ト書き	引用 -会話指示	引用 -典拠	会話	注釈	計
と思う	4	19	1	337	2	363
と存ずる	1	6		523	1	531
計	5	25	1	860	3	894

表4・5に、「と思う」「と存ずる」を使用する人物の上位を示す。「大名」「主」「太郎冠者」「夫」「出家」等、両表現とも多用している話者がいる一方、表4のみに見られる「祖父」「教え手」、表5のみに見られる「髻」「甥」「田舎者」等、その使用が偏っている人物も存在する。このように、会話文・非会話文の別では同じ傾向を示す両語も、話者においてはやや異なる状況が見て取れる。そこで、次節以降では、両表現の使用状況を、話手や聞き手、場面等の観点から見ていく。

表4 「と思う」の話者（上位30名）

話者	用例数	話者	用例数
大名	35	鬼	4
主	32	次郎冠者	4
太郎冠者	31	武悪	4
夫	20	男一	3
妻	18	貸手	3
祖父	12	麻生	3
出家	11	猿引	3
女	10	丹波	3
住持	9	継母	3
果報者	8	柿主	3
吉田の何某	7	見付の者	3
山伏	5	すつば	3
伯父	5	勾当	3
教え手	5	山賊	3
亭主	4	おこ	3

表5 「と存ずる」の話者（上位32名）

話者	用例数	話者	用例数
太郎冠者	58	牛博勞	5
主	49	何某	5
出家	24	博打打	5
夫	22	果報者	5
男	18	浅鍋売	5
髻	18	通行人	4
甥	11	巖島の社人一	4
大名	11	吉田の何某	4
女	10	猿引	4
田舎者	8	兄	4
妻	8	伯藏主	4
男一	7	見付の者	4
閻魔王	7	参詣人一	4
住持	7	柑子売	4
孫一	6	所の者	4
すつば	6	舅	4

2.2 「と思う」のみを多用する話者・「と存ずる」のみを多用する話者について

表4の中で、「と思う」のみを使用する話者はどのくらいいるだろうか。表4のみにあがった話者について、「と存ずる」の使用数を調べ、「と思う」「と存ずる」の用例数の合計のうち、「と思う」の使用率が何%であるかを表6に示した。同様に、表5のみにあがった話者について、「と存ずる」の使用率を表7に示した。

「と思う」の使用率が100%となっている話者、つまり「と存ずる」を全く使用しない話者は、「祖父」「教え手」「次郎冠者」「武悪」「麻生」「継母」であり、「と存ずる」の使用率が100%の話者、つまり「と思う」を全く使用しない話者は、「髻」「甥」「田舎者」「閻魔王」「博打打」「通行人」「巖島の社人一」「参詣人一」「柑子売」「所の者」であった。

表6 表4のみにあがった話者の「と思う」使用率

話者	と思う	と存ずる	「と思う」率(%)
祖父	12	0	100
山伏	5	3	62.5
伯父	5	1	83.3
教え手	5	0	100
亭主	4	3	57.1
鬼	4	1	80
次郎冠者	4	0	100
武悪	4	0	100
貸手	3	1	75
麻生	3	0	100
丹波	3	2	60
継母	3	0	100
柿主	3	1	75
勾当	3	3	50
山賊	3	2	60
おこ	3	3	50

表7 表5のみにあがった話者の「と存ずる」使用率

話者	と存ずる	と思う	「と存ずる」率(%)
髯	18	0	100
甥	11	0	100
田舎者	8	0	100
閻魔王	7	0	100
孫一	6	1	85.7
牛博勞	5	1	83.3
何某	5	2	71.4
博打打	5	0	100
浅鍋売	5	1	83.3
通行人	4	0	100
巖島の社人一	4	0	100
兄	4	2	66.7
伯藏主	4	2	66.7
参詣人一	4	0	100
柑子売	4	0	100
所の者	4	0	100
舅	4	1	80

*「男」は表5のみにあがっていたが、表4の「男一」と同等に扱うこととし、表7にはあげなかった。

2.2.1 「と思う」のみを多用する話者

「と思う」を多用するが「と存ずる」を使用しない人物として、「祖父」「教え手」「次郎冠者」「武悪」「麻生」「継母」がいる。それぞれの話者について、「と思う」の使用場面や聞手との立場の上下関係等を表8に示した。なお、「名乗り」等の場面や聞手の情報についてはコーパスデータに付与されていないため、想定される場面や聞手については筆者が個別に判断を行った。話手と聞手の立場の上下関係については、話手が聞手と同等以上の立場にある場合は「話手 \geq 聞手」、話手が聞手より立場が低い場合は「話手 $<$ 聞手」と示す。立場の高低については、主人と使用人、舅と髯のような明らかな上下関係があるか否かで判断した。

表8 「と思う」のみを使用する人物とその使用場面

話者	名乗り	独白	話手 \geq 聞手	聞手の内訳		話手 $<$ 聞手	一人称以外	用例数
				孫一6, 山伏(=孫)5	髯4			
祖父			11	孫一6, 山伏(=孫)5			1	12
教え手			4	髯4			1	5
武悪			4	太郎冠者4				4
次郎冠者			3	太郎冠者3			1	4
麻生			3	藤六3				3
継母	3							3

表8にあがった人物のうち「祖父」「教え手」「麻生」については、その場面の登場人物の中で上位の立場にあるといえる。具体的に見ていくと、「祖父」の会話相手はいずれの曲においても

「孫」であり、「教え手」は、聞手である「聾」に作法を教える人物である。また「麻生」の会話相手は奉公人の「藤六」であり、いずれの人物もその場面において高い立場にあるといえる。(2)の例は「祖父」が「孫一」に、(3)は「教え手」が「聾」に「と思う」を用いている例である。

- (2) (祖父) やい、いづくまでもゆかうと思ふたが、もはやくたびれた、まだとをひかな
 (孫一) いや参る程に是でござある (やくすい上:109)
- (3) (教え手) たそ
 (聾) わたくしでござる
 (教え手) やれへ、たれぞと思ふたよ、内へおりやりはせひで、とぎまがましひなふ
 (ほうちやう聾上:368)

「次郎冠者」および「武悪」は使用人であり、立場の高い人物とはいえないが、これらの人物による発話の聞手は、同じく使用人の「太郎冠者」であり、同等の立場の聞手に「と思う」を用いていることがわかる。(4)は「次郎冠者」が「太郎冠者」に「と思う」を用いている例である。

- (4) (次郎冠者) いつもへるすに、さけをぬすんでのむによつて、じゃあらふとおもふ
 (太郎冠者) おぬしがいふごとくぬすませまひようじゃあらふまでよ
 (ぼうしぱり上:292-293)

「継母」についてはやや性格を異にし、「と思う」3例はいずれも名乗りの場面の例である。一般に名乗りの場面では「と存ずる」が多用されるが(村上1993等。2.4で後述)、次の(5)のように「継母」は「と思ひ(候)」を用いている。

- (5) わらはにもむすこが御入候へども、中へてうあひもなく候程に、きやうの殿をにくし
 へと思ひ候折節、寺よりくだりて候間、行人をかたらひいのりころして候、しがひをかくして候はば、ちちごの不審めされうずると思ひ、そのままおきて候、むなしくなりたるよし、ちちごに申さばやと思ひ候、いかに御入候か (ままこ上:451)

このように、「と思う」はその場面の中で高い立場にある人物の発話で用いられることが多く、いずれの話者についても、高い立場の聞手に対して「と思う」を用いている例は見られなかった。

2.2.2 「と存ずる」のみを多用する話者

「と存ずる」を多用するが「と思う」を使用しない人物として、「聾」「甥」「田舎者」等がある。それぞれの話者について、「と存ずる」の使用場面や聞手との立場の上下関係等について示した(表9)。話手が聞手より立場が高い場合は「話手>聞手」とし、話手が聞手と同等以下の立場にある場合は「話手≤聞手」として整理した。

基本的には、「と存ずる」は定型的な名乗りや独白、話手が聞手と同等以下の立場にある場合に用いられている。明らかに聞手より話手の立場が高い場合に「と存ずる」が使用されている例は今回の調査の範囲では見られなかった。

表9 「と存ずる」のみを使用する人物とその使用場面

話者	名乗り	独白	話手>聞手	話手≤聞手	聞手の内訳	一人称以外	用例数
聾	8			10	教え手10		18
甥	4			7	伯父6, 伯母1		11
田舎者	4			4	すつば3, 目代1		8
閻魔王	5	1		1	朝比奈1		7
博打打	2			3	有徳人2, 何某1		5
通行人	3			1	菊一1		4
厳島の社人一	1			3	厳島の社人二3		4
参詣人一	2			2	参詣人二2		4
柑子売	2	1		1	亭主1		4
所の者	2			2	出家2		4

「教え手」から作法を教わる「聾」、親族の中での上位者である「伯父」「伯母」と会話する「甥」、不案内な都で「すつば」や「目代」と会話する「田舎者」のように、その場面の中で低い立場にあると想定される人物が配慮表現として「と存ずる」を多用していることは自然に思われるが、それ以外の人物についてはどのように解釈できるだろうか。以下、主として聞手との関係から具体的に見ていく。

「閻魔王」が「と存ずる」を用いているのは、ほぼ名乗りや独白の例であるが、これらはいずれも「地獄へ落とそうと存ずる」に類する形であり、定型的な表現のようである。「あさいな（朝比奈）」に対して用いている例が1例あるが、これも（6）のように「地獄へ落とそうと存ずる」に類する表現である。また、「閻魔王」と「あさいな」が初対面であり、「親疎」の「疎」にあたるために、丁寧な言葉遣いをしている可能性がある。

- (6) よきもののあらば、ちごくへせめおとさうずるとぞんじて是まで出たれば、なんちがきたつて有程に、ちごくへせめおとひてくれうぞ
(あさいな上: 464)

「博打打」は「有徳人」と「何某」に対して「と存ずる」を使っている。『虎明本狂言集』に登場する「博打打」はその場面の中で立場が低いことが多いようであり、「にわう」の曲においては、博打に負け「何某」のところに援助を求めに行く人物、「みめよし」の曲においては「有徳人」のところに自分の息子を婿入りさせようとする人物として描かれている。「博打打」という属性であるが、ぞんざいな言葉を使う人物として描かれているわけではなく、その場面における立場の低さのためか、基本的に丁寧な言葉遣いをしているようである。

- (7) さいぜんも申ごとく、もし人がみまらしてはと存、小袖をかづけて同道いたひたほどに、みな人のなひ時、小袖をとらせてみさせられひ
(みめよし下: 521)

「通行人」が「と存ずる」を使用している例は、座頭の「菊一」が「勾当」を背負おうとしてるところで偶然通りかかった「通行人」が「菊一」の背に乗るという場面のものであり、「菊一」に対して「と存ずる」が使用されていると判断したが、この（8）の例は聞手「菊一」へ向けら

れた発話というより、自らの行動を観客に説明する独白に近いものともいえる。

- (8) (菊一) ぜひに及ばぬ、其儀ならばおいませう
 (勾当) おはひでかなはふか
 (ト書き) てをうしろへまはすとき
 (通行人) 一段の事じや、さむひにおはれふと存ずる (どぶかつちり下: 272)

「参詣人一」は「にわう」「やるこ」の二曲において、「参詣人二」に対して「と存ずる」を使用している。「にわう」では「参詣人一」が「わかい衆を同道致てまいらふ」(下: 349)と述べた直後に「参詣人二」を誘い、「やるこ」でも、「爰こゝに某がとうかんひ人が御ざるが、是をさそふてまいらふ」(下: 386)と述べた直後に「参詣人二」を誘っており、いずれにおいても「参詣人一」が「参詣人二」より立場が低いということも、親疎の「疎」にあたるということも考えにくい。穂田(1975: 4)は「場面的存在としての『神仏』に対する態度が、下位者である聞手に対しても向けられる」例について述べているが、この「参詣人一」の例も、神仏に対する態度が「参詣人二」にも向けられた結果、「と存ずる」が使用されている可能性がある。なお、「やるこ」の例では、(9)のように、「参詣人一」「参詣人二」が互いに「と存ずる」を用いている。

- (9) (参詣人一) 是へまいるもべちの事でも御ざなひ、此間はいづかたへもゆさんにまいらぬ程に、遊山がてら、くらまへ参らふとぞんじて是へさそいにまいつたが、御ざるまひか
 (参詣人二) 内々われらもゆさんにまいりたひとぞんずる処に、お出忝なひ (やるこ下: 386)

「巖島の社人一」が「巖島の社人二」に対し「と存ずる」を用いている例も同様に、神仏の前という場面的な要因はあろうが、「巖嶋」の曲において、両者は初対面と思われ、また、「巖島の社人一」は「巖島の社人二」のことを「是に付ても御僧たつとき御方なると存ずる」(下: 458)と述べており、尊い人物である「巖島の社人二」への敬意的配慮として「と存ずる」を用いていると考えられる。

「柑子売」は「亭主」に対し「と存ずる」を用いている。「柑子売」は「亭主」について、「こゝにしろ人が御ざる程に」(かうじだわら下: 344)と述べており、主従関係のような明確な上下関係はないと思われるが、「柑子売」は「亭主」に対し、「と存ずる」以外にも(10)に見られるように「こなた」や「かしこまった」等の表現を用いる等、丁寧な言葉遣いをしている。

- (10) (柑子売) それは仕合で御ざる、けふは日もくれて御ざる程に、是をこなたへあづけませう、わたくしにまたよそへ参る所が御ざるほどに、あすとうとりにまいらふ
 (亭主) 中へあづからふ、うらへやつておきやれ
 (柑子売) かしこまった 忝なふござる (かうじだわら下: 344-345)

「所の者」が「出家」に対して「と存ずる」を用いている例が2例あるが、両者は初対面と思われ、

互いに丁寧な言葉を用いている。なお、いずれの例も不審な事態に遭遇した「出家」に事情を尋ねられた「所の者」が説明し、弔いを促す場面での用例であり、「お僧もちととぶらふて御通りあれかしと存候」(つうゑん下:241)、「お僧もぎやくゑんながらとぶらふてお通りあれかしと存候」(たこ下:252)と、ほぼ同一の文言で、定型的な台詞の中で用いられている。

このように、「と存ずる」は、主として立場の高い者・初対面の者への配慮や、神仏の前という場面で用いられているようである。

2.2.3 「と思う」のみを多用する話者・「と存ずる」のみを多用する話者のまとめ

基本的には話手が聞手と同等以上の立場の場合に「と思う」が用いられ、話手が聞手と同等以下の立場の場合に「と存ずる」が用いられるという対照的な傾向が見られた。これは中世軍記物語で見られる傾向と同様であり、また、李(2006:62)が「独白以外の時に使われる『ウと思う』系は『ウと思う』の形式になるが、これは必ず目下の相手役がいるときに使われる」としているのもこの傾向の中に位置づけてよいと考える。ただし、「と思う」が特に礼を失した表現であるというわけではなく、「と存ずる」というほぼ意味が同じでかつ謙譲・丁重の形式が多用されているために、高い立場の聞手に対し、敬語的ニュアンスを持たない「と思う」を選択しにくいのだと考えられる。その他、「と存ずる」は、初対面の者への配慮表現や、定型的な台詞の中でも用いられているが、総じて『虎明本狂言集』における「と存ずる」は、単なる漢語的な硬い語としてではなく、「と思う」に比べ聞手への配慮を伴った表現として用いられていたといえる。なお、話手と聞手の立場が同等の場合は、双方が「と思う」を使う例(太郎冠者と次郎冠者、太郎冠者と武悪)、双方が「と存ずる」を使う例(参詣人一と参詣人二)ともに見られ、後者については神仏に関する場面であることが関わっていると考えられる。

2.3 「と思う」「と存ずる」両方を多用する話者について

次に、「と思う」「と存ずる」のいずれも10例以上使用例がある、「大名」「主」「太郎冠者」「夫」「出家」「女」について検討したい。表10に、それぞれの人物の「と思う」「と存ずる」の用例数をあげる。また、上記6話者の「と思う」「と存ずる」の使用場面を表11・12に示す。

表10 「と思う」「と存ずる」とも10例以上
使用する話者

話者	と思う	と存ずる	合計
太郎冠者	31	58	89
主	32	49	81
大名	35	11	46
夫	20	22	42
出家	11	24	35
女	10	10	20

表11を見ると、「と思う」については、2.2.1で見られた傾向と同様、基本的には話手が聞手と同等以上の立場にある場合に用いられている。しかし、「太郎冠者」に「話手<聞手」の例が

表 11 話者別「と思う」の使用場面

話者	と思う							合計
	名乗り	独白	次第	話手≥聞手	聞手の内訳	話手<聞手	一人称以外	
太郎冠者		8		8	売り手1, 武悪4, 次郎冠者3	3	12	31
主				23	太郎冠者22, 太郎冠者・次郎冠者1		9	32
大名	1			24	太郎冠者19, 女2, 昆布売2, 下人1		10	35
夫	1			13	妻10, 告げ手2, 妻・出家1		6	20
出家		5	2	3	所の者一2, 蜻の精1		1	11
女	2	1		3	大名1, 新発意1, 山賊1		4	10

3例見られる。この3例はいずれも鬼・小名類の例であり、「主」に対し失敗の言い訳をする場面において、「(その時は)～と思ひて(このようなことをした)」のような形で従属節中にあらわれるものである。言い訳の場面であるために、主文末以外の言葉遣いにまで気が回っていない様子があらわれているようにも見られる。また、(11)の例については同一発話内に「仰られ」、(12)の例については、直前に「と存て」が使用されており、既に敬意的配慮を示す形式があるため、「と存ずる」を重ねて敬意を示さずとも発話全体としては失礼な物言いにはならないということや、(12)に関しては「…と存ずる…と存ずる」と表現が重複するのを避けるということも関係しているようか。

- (11) (太郎冠者) 私は又、かねの音をきひてこひと仰られた程に、それかと思ふてきゐて参つた、それならばそれととう仰られひで
 (主) にくひやつめが、最前のほど、のし付にせうと云たに、そうじておのれがやうなやくにたゝぬやつはなひ (かねのね上:581)
- (12) (太郎冠者) おいて行、おいてゆかずはきりころすと申た程に、命にはかへられぬと存て、こじきにとらすと思ふてとらせてかへつて御ざる
 (主) さて―それはしたゝかな人であつたな (なまぐさ物上:597)

2.2.1 で見たように、「と思う」は目上の聞手に対しての使用が少ない表現であるが、このように従属節内であれば、高い立場の聞手に対する発話で「と思う」を使用しにくいという制限が弱

表 12 話者別「と存ずる」の使用場面

話者	と存ずる						一人称以外	合計
	名乗り	独白	次第	話手>聞手	話手≤聞手	聞手の内訳		
太郎冠者		9			48	主22, 大名18, 売り手3, 次郎冠者1, 仲裁人1, 妻1, 新座の者1, 客人1	1	58
主	34	8		3	3	客人一2, 仲裁人1	1	49
大名	8			1	2	女2		11
夫	12	2		1	7	出家4, 妻1, 仲人1, 仲裁人1		22
出家	22	2						24
女	7	1			2	大名1, 男1		10

まるのだと考えられる。なお、高い立場の聞手に対して主文末で終止形の「と思う」が使用された例は見られなかった。

一方「と存ずる」も、名乗りや独白を除くと、2.2.2で見られた傾向と同様に、聞手が話手と同等以上の立場にある場合に用いられることが多い。ただし、表 12 には「話手>聞手」の例が 5 例（「主」3 例、「大名」1 例、「夫」1 例）見られる。これらはいずれも「太郎冠者」に対して「と存ずる」が使われる例である。うち 4 例は (13) のように富士や鞍馬への参詣の話であるという共通点がある。既に (9) の例でも見たように、あらたまった口調となっている背景として、神仏への畏怖の気持ちが影響していよう。つまり、このような「と存ずる」の持つ敬意は、立場の低い聞手のみに向けられたわけではないと考えられる。

- (13) (主) 近比めでたひ、此福を某がとらふとぞんずる
 某にもふくを下された
 (太郎冠者) それはもろともにめでたうござる (くらままいり上:527)

もう 1 例は、話手が「夫」、聞手が「太郎冠者」という例であるが、「夫」は「太郎冠者」に対して話しかけていると思込んでいるが、実際は太郎冠者になりすました「妻」が聞手である。この (14) の例においては、妻への恐れ of 気持ちが述べられており、対象は神仏ではなく妻であるが、畏怖の気持ちが背景にある点で (13) の例と類似している。

- (14) (夫) しぜん山のかみがそのふみをみたらば、なふ中へただはおくまひとぞんじて
 (はなご下:64)

このように、「と思う」「と存ずる」の両表現とも多く使う話者であっても、畏怖の気持ちが背景にある等の特定の状況以外では、「と思う」は話手と同等以下の立場の聞手に対して用いられ、「と存ずる」は話手と同等以上の立場の聞手に対して用いられることがわかる。

2.4 名乗り・独白について

「と存ずる」については名乗りの場面での使用例が多いことも注目される。例えば、表 11・12 を見ると、「と思う」を名乗りの場面で使用しているのは「大名」「夫」「女」による計 4 例であるのに対し、「と存ずる」を名乗りの場面で使用しているのは「太郎冠者」以外の 5 人物、計 83 例である。この名乗りの場面における「と存ずる」は、登場人物に対してではなく、観客への配慮として用いられていると考えられる（村上 (1993: 568) も、「にて候…ばやと存候」等を「観客に対する配慮も高い」、「でござる…うと存る」を「観客に対する配慮の表現として標準的なものと認められる」等と位置づけている）。例えば (15) の例は「大名」の発話であるが、新しい者を雇うという意志を述べるにあたり、名乗りとしては「と存ずる」を用い、その後、「太郎冠者」に同様の内容を述べる発話では「と思う」を用いる、という使い分けが見られる。

- (15) (大名) 一人にてつかひたらぬ程に、新座の者をあまたおいてつかはふと存る、あるかやい

- (太郎冠者) お前に
 (大名) ねんなうはやかつた、汝がよろこぶ事がある
 (太郎冠者) いかやうな事でござるぞ
 (大名) 汝一人にてはわれもめいわくにあらふず、身共もつかひたらぬ程に、新座の者をおいてつかはふと思ふがよからふか (鼻取りずまふ上:192)

また独白においては「と思う」「と存ずる」両表現とも見られる。独白であれば聞手はいないので、本来「と存ずる」のような配慮表現は不要であるが、これも名乗りと同様、観客への配慮として用いられているものであると考えられる。(16) (17) は独白における「と存ずる」の例である。

- (16) (主) 太郎くわじやを留守においてござるが、何といたひているぞ やうすを見うと存る、あらきどくや、おくびやうなやつじやがきどくに夜まはりをするよ、
 (くいか人か上:592)
 (17) (主) のさものを一人使にやればおそひと存て、二人やつたれば、今にかへらぬ、にくひ事じや、何事をしておるぞ、見にまいつて、あそんでおるならば、さんへにせつかんいたさうずる、
 (文荷:579)

なお、李 (2006: 62) も、名乗りや独白において、『ウと思う』系は『ウと存ずる』あるいは『ばやと存ずる』のような敬語の形を取る。独白の時も、観客を聞き手として想定しているため、独白に「ウと思う」がその形式のまま使われることはない」としているが、これは「ウと思う」の形式に限らず、「と思う」の形式全体にいえることのようにである。「と思う」が名乗りや独白の場面において使われる際は、(18) の例のように「と思ふたれば」「とおもふが」等、文末ではなく文中の場合か、「候」がついた「と思ひ候」の形であり、敬語を伴わない文末終止形の「と思う」の用例は見られなかった。

- (18) 言語道断の事じや、誠になくかと思ふたれば、そばに水ををひて目へぬる、扱々にくひ事じや、此よしたのふだ人に申さう
 (すみぬり上:185)

名乗りという形式は狂言に特徴的なものであるが、(19) (20) のように中世軍記物語においても、その場の中で高い立場にある人物が、聞手の多数いる公の場面で自らの行動予定や決意を提示する際に「と存ずる」を用いており、これは狂言における名乗りの形式と類似している。

- (19) 清盛のたまひけるは、「悪源太、大勢にて待んには、都へのほりえずして、阿倍野、天王寺の間にしかばねをとゞめんこと、理の勇士にあるべからず。しよせん当国の浦より船をあつめて、四国の地にをしわたり、鎮西の軍勢をもよほし都へせめのほりて、逆臣をほろぼし、君の御いきどをりを休めたてまつらばやと存ずる。をのへ、いかゞ」とありしかば、
 (『平治物語』:168)
 (20) 越後守仲時、軍勢どもに向つて宣ひけるは、「(略) 今是我旁のために自害をして、生前の芳恩を死後に報ぜんと存ずるなり。
 (『太平記』1: 471)

なお、(19) (20) の例は、穂田 (1975: 12) が「いわば晴れの言葉」とし、「聞手非上位で、シテ一人称の〈存ず表現〉は、自卑・丁重の謙讓表現ではあり得ないが、少くとも文脈的には表現の莊重性を共通にしている」(穂田 1975: 13) としているものにあたると思われる。このような軍記物語の例および、狂言における名乗りの「と存ずる」についても、晴れの言葉として莊重性を認めることは可能であろうが、聞手が多数いる公の場での発言では、話手の立場に関係なく丁重・丁寧な言葉遣いをするという傾向があらわれているとも考えられる。

2.5 「と思ひ候」について

ここまで「と思う」と「と存ずる」について見てきたが、「と思う」に敬語形式の「候」がついた「と思ひ候」と「と存ずる」には違いがあるのかについても考えてみたい。「と思ひ候」の例は 13 例で、[本文種別] が「会話」の用例は、「出家」5 例、「継母」2 例、「女」「妻」「若市」各 1 例で、いずれも名乗りの場面において用いられていた。「と思ひ候」の話者は、「出家」を除いていずれも女性であることから、女性は「存ずる」よりも「思ひ候」を使う傾向があったといえる。そこで、女性話者による「と思う」「と存ずる」の用例数を表 13 に示す。

表 13 女性話者による「と思う」
「と存ずる」の用例数

話者	と思う	と存ずる
妻	18	8
女	10	10
継母	3	
下京の女	2	3
若市	2	
上京の女	2	1
お寮	1	
女房	1	
伯母	1	
後家	1	1
計	41	23

「妻」「女」等、女性話者が「と存ずる」を使用する例も少なくないが、合計数では「と思う」の方が多い。表 3 で、「会話」において「と存ずる」(523 例) が「と思う」(337 例) の約 1.5 倍の用例数であったことを考えると、女性は男性に比べ、「と存ずる」より「と思う」を使用する傾向があるといえる。なお、底本の校訂者による注(大塚編 2006 下: 69)に「虎明本ではサウラフの表記は多く『候』と漢字表記であるが、この場合のように女性のせりふ中では仮名表記にする傾向がある」とあるように、女性の発話については意識的な書き分けがなされることがあったようであり、「と思う」「と存ずる」の使い分けにもこのような意識があらわれている可能性がある。なお、穂田 (1975: 3) が中世の「存ずる」には一貫して「語感の莊重性」があると述べているが、「存ずる」の語の持つ「莊重性」が女性の発話としてなじみにくかったのであろう。このように、女性話者が「と存ずる」より「と思う」を使いやすいのだとすると、「と思う」の敬

語形式として、「と存ずる」の代わりに「と思ひ候」の形が選択されたということが考えられる。

(21) は、「女」が「と思ひ候」を使用している例である。

- (21) 此野ははりまの国いなみのと申て、かくれなきおそろしきのにておりやしますものを、人もつれいでまいつて、このくれがたに何としてようおりやらふぞ、ああおそろしや、いそがばやと思ひさふらふ、さればこそどどめくが、おそろしや どなたへまいつてようおりやらふぞ
(鬼のまま子 上: 488)

また、虎明本以外の狂言資料として、和泉流の祖本である『狂言六義』を確認したところ、「と思ひまいらせ候」の形の例が「鬼の継子」の曲の冒頭部分に見られる。虎明本において見られた(21)の例とは大幅に本文が異なるものの、同様に「女」による発話で、「と存ずる」ではなく「と思う」+「候」の形式が選択されていることがわかる。

- (22) 此ほどは、再々、人を遣され候ほどに、在所へ、参らばやと、思ひまいらせ候
(鬼の継子: 293)

なお、虎明本において「と思ひ候」の用例が見られた箇所について、『狂言六義』の該当箇所を確認したが、大幅に本文が異なっていたり、その曲自体が掲載されていなかったりと、両本で共通して「と思ひ候」が使用されている例は確認できなかった。

女性話者以外で「と思ひ候」の用例が見られた「出家」の例についても表 13 と同様の調査をしたところ、「と思う」の使用が 11 例であるのに対し、「と存ずる」が 24 例と、「と存ずる」の方が多く使われていた。すなわち、「出家」が「と存ずる」という表現を使いにくかったわけではないようであり、「出家」の発話で「と思ひ候」が選択されている理由についてはさらなる検討が必要であろう。ただし、『狂言六義』で見られた「と思ひ候」の用例の 3 例は、いずれも僧によるものであり（「祐善」の曲の本文および抜書にほぼ同じ文言の例が 1 例ずつ、虎明本には掲載されていない「黄精」の曲に 1 例）、出家の身分の者が「と思ひ候」という形式を使用しやすいという傾向は認めてよいと考えられる。

このように「と思ひ候」は女性および出家の者により用いられやすい表現であることが推測されるが、会話以外での用例を見ると、台本に書き入れられた「注釈」における「と思ひ候」の例として、(23) のように「と思ひ候」と「と存じ候」を連続した注において使用している例が見られた。この「と思ひ候」「と存じ候」は台本を読む者に対する配慮表現であろうが、このように二つの表現が連続して使われている例があることは注目される。

- (23) 私に云、つづみをけをあけてもみいで、をぢさせられうと云はふしん、ただかしこまつたと云て、つづみをけをあけてみて、かぶりをふつて、かををかくして、をぢさせられなと云て、つめたるがましかとをもひ候
惣じて、拍子物も、又かやうのたぐひも、うりてささやきおしへたるがましかと存候
(よろい 上: 68)

また、「ゆうぜん」の曲の注の中に、(24)のような「と思ひ候」の例があるが、『狂言六義』において(24)の例に該当する箇所を見ると、(25)のように「と存じ候」となっており、これは両者は機能的な面で置き換えが可能な表現であることを示唆している。

(24) 都へのほり、かさとの明神へもまいらばやと思ひ候、共云 (ゆうぜん下:250)

(25) 都、笠取の明神へ参らばやと存候 (祐善:437)

連続する注において「と思ひ候」「と存じ候」が用いられていること、同一箇所が本により「と思ひ候」「と存じ候」と記されている例があること、また基本的には「と存ずる」が使われる名乗りの場面で「と思ひ候」の形が見られることをあわせて判断すると、「と思ひ候」も「と存ずる」と同様に丁寧な形式であり、待遇面や機能面での差により使い分けられているのではなく、話者の属性や人物像等によって選択されているものであると考えられる。

2.6 中世語資料との比較

ここで、『虎明本狂言集』における「と思う」「と存ずる」について、渡辺(2011)で述べた他の中世語資料における結果と比較することで、その性格の位置づけを試みたい(ただし、渡辺(2011)は文末表現に限って調査したものである)。同じ中世語の資料とはいえ、軍記物語や説話集と『虎明本狂言集』とでは、成立年代に400年程の開きがあるものもあり、ジャンルとしても物語・説話と舞台の台本という、性質の異なるものであるが、『虎明本狂言集』における両表現は、この中でどのように位置づけられるであろうか。

これまで見てきたように、『虎明本狂言集』においては、「と思う」が目上の聞手への発話ではあらわれにくい、「と存ずる」は目下の聞手への発話ではあらわれにくいという特徴があった。これは、渡辺(2011)で確認した中世軍記物語における傾向と同様のものではあった。

1節でも触れたように、同じ中世語の資料でも、『宇治拾遺物語』『古今著聞集』等の説話では、文末表現「と存ずる」の例がほぼ見られない。「と思う」が目上の聞手への発話ではあらわれにくい傾向、また、「と存ずる」を多用する傾向は、中世語資料の中でもある程度会話文の量が多く、かつ自らの考えを表明する場面の多い狂言や軍記物語に特徴的なものであるといえる。

また、『虎明本狂言集』においては名乗りの場面で「と存ずる」が多用されている点が特徴的であるが、軍記物語においても、聞手の多数いる公の場面で自らの行動予定や決意を提示する際、聞手との上下関係に関わらず「と存ずる」が用いられていることがあり、場面は異なるものの、その用法の根底はつながっているようである。

ただし、軍記物語においては、公の場面であっても、話手が聞手より立場が高い場合には、(19)(20)のように「と存ずる」「と存ずるなり」等、「候」が後接していない形で用いられるのに対し、聞手の立場が高い場合には次の(26)のように「候」が後接した「と存じ候」の形が用いられるという傾向が見られる。このことから、軍記物語においては、「と存ず+敬語助動詞・補助動詞」の形で聞手に対する敬意的配慮を表わしていたと考えられる。

- (26) 新田左兵衛督も、同じく坂本へ帰らんとし玉ひけるを、船田長門守経政、馬を遮りて申けるは、「軍の利、勝に乗る時、北るを追ふより外の質はあらじと存じ候ふ。

(『太平記』 2: 238 ※船田長門守経政は新田左兵衛督の家臣)

一方、『虎明本狂言集』の会話文においては「と存じ候」の形が 27 例、「候」の伴わない「と存ずる」の形が 496 例となっている。名乗りだけでなく、主従関係の「従」にあたる話者から「主」への発話であっても、「候」を伴わない「と存ずる」の形が用いられている。

- (27) (太郎冠者) 某はみやうがをたぶるに依て、どんになつて物わすれして、よひかたなを一こしひろふてござあるが、びしやもんの御利生かと存

(主) 何とよひ刀をひろふた (どんごむさう 上: 538)

なお、「と存じ候」の話者は、「住持」「出家」「法華僧」「巖島の社人」やくらままいりに向かう「主」、「出家」に事情を尋ねられた「所の者」、「閻魔王」「鬼」といった神仏関係等の畏怖の念を伴う場面に登場する者に偏っている。

このように、『虎明本狂言集』において文末表現「と存ずる」は、敬語助動詞・補助動詞を伴わない形で、あらたまつた、公的な性格を持つ思考動詞として用いられる傾向が見られ、これが軍記物語との相違点であるといえる。

ただし、軍記物語でも、キリシタン資料である『天草版平家物語』には、敬語助動詞や補助動詞を伴わない「と存ずる」の形が目上の聞き手に対して用いられる例が見られ、『虎明本狂言集』における使われ方と類似していた。

- (28) 清盛いかにかにとあきれらるれば、ややあつて重盛涙を押さへて申さるは：この仰せを承るに御運は、早末になつたと存ずる：人の運命の傾かうとは、必ず悪事を思ひ立つものでござる。(『天草版平家物語』: 95)

『天草版平家物語』と『虎明本狂言集』において、全体として文末辞の用法等に類似性があるのは、その成立年代や口語的性格からして納得のいくところである。ただ、中世軍記物語とも共通して用いられた表現であり、また、立場の上下が関わる敬語形式である「と存ずる」のような表現であっても、『天草版平家物語』は他の諸軍記物語よりも『虎明本狂言集』と共通性を持っていた。『虎明本狂言集』において見られる「と存ずる」の用法は、室町時代の口語的表現を反映したものと考えられる。

3. おわりに

『虎明本狂言集』における「と思う」「と存ずる」は、いずれも主として会話文にあらわれるが、両表現の使用の選択にあたっては、話手・聞き手の属性が関与している。ト格をとる形式について見てみると、基本的には話手の立場が聞き手と同等以下の場合には「と存ずる」が、話手の立場が聞き手と同等以上の場合には「と思う」が用いられる。観客への配慮表現として、名乗りや独白等の場面においても「と存ずる」が用いられることが多い。

『虎明本狂言集』において、目上の聞手（観客を含め）に対する発話で「と思う」が少ないのは、「と存ずる」という謙譲・丁重の形式が多用されている中で、高い立場の聞手に対し、「と思う」をあえて選択し、使用することははばかれるためであると考えられる。また、「と思ひ候」のように丁寧語化された形式であっても、女性による名乗りや注釈等、限られた範囲にしかあらわれない。ただし、「と思ひて」のように、文末形式以外の形であれば、「と思う」を目上の聞手に対して使用しにくいという制限は弱まるようである。なお、男性話者に比べ女性話者は「と思う」を使用する傾向があり、これも「と思う」の特徴といえる。

同じ中世語の資料と比較すると、軍記物語と類似した傾向があり、「と思う」が目上の聞手への発話であらわれにくい、「と存ずる」が目下の聞手への発話であらわれにくいという点で共通していた。また、聞手の多数いる公の場面で自らの行動予定や決意を提示する際に「と存ずる」が用いられている点でも類似しているが、軍記物語においては「と存じ候」の形で目上の聞手への敬意的配慮を表わすのに対し、『虎明本狂言集』においては目上の聞手に対しても「候」を伴わない「と存ずる」の形が用いられることが多い等、異なる点も見られた。

参考文献

- 穂田定樹 (1975) 「『存ず』について」『大谷女子大学紀要』9: 1-19.
 小林正行・市村太郎 (2013) 「『虎明本狂言集』コーパスの構造化—仕様と事例の検討—」『第3回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』323-332.
 李淑姫 (2006) 「虎明本狂言集における『ウと思う』の用法—推量・意志の助動詞「ウ」との比較—」『日本學報』68: 55-67.
 村上昭子 (1993) 「『大蔵虎明本狂言集』における終助詞『ばや』について」小松英雄博士退官記念日本語学論集編集委員会 (編) 『小松英雄博士退官記念 日本語学論集』555-578. 東京: 三省堂.
 渡辺由貴 (2007) 「『と思う』による文末表現の展開」『早稲田日本語研究』16: 37-48.
 渡辺由貴 (2011) 「中世における文末表現『と思ふ』と『と存ず』」『早稲田日本語研究』20: 34-45.

関連 Web サイト

- 国立国語研究所コーパス開発センター (市村太郎・渡辺由貴ほか) 編 (2015) 『日本語歴史コーパス室町時代編 I 狂言』(短単位データ 0.9, 中納言バージョン 1.5) <https://maro.ninjal.ac.jp>

例文出典

- 『虎明本狂言集』…大塚光信 (編) (2006) 『大蔵虎明能狂言集 翻刻 註解』上・下 大阪: 清文堂出版.
 『狂言六義』…北原保雄・小林賢次 (1991) 『狂言六義全注』東京: 勉誠社.
 『天草版平家物語』…近藤政美・池村奈代美・濱千代いづみ (編) (1999) 『天草版平家物語語彙用例総索引』1 東京: 勉誠出版.
 『太平記』『平治物語』…『新編日本古典文学全集』(小学館), Japan Lib Knowledge (<http://japanknowledge.com/library/>).

The Usage of *to omou* and *to zonzu* in *Toraakira-bon Kyogensyuu*: Using Data from the Corpus of Historical Japanese

WATANABE Yuki

Adjunct Researcher, Center for Corpus Development, NINJAL

Abstract

This paper discusses the usage of *to omou* and *to zonzu* in *Toraakira-bon Kyogensyuu*, from the point of view of the speaker and the situation, by using data from the Muromachi period series of the Corpus of Historical Japanese built by the National Institute for Japanese Language and Linguistics.

Analysis shows that *to omou* is predominantly used toward a listener of lower or equal status. On the other hand, *to zonzu* is used toward a listener of higher status and in self-introduction and monologues to express respect for the audience. In addition, females tend to use *to omou* more than males. Finally, this paper discusses the similarities and differences in the usage of *to omou* and *to zonzu* between *Toraakira-bon Kyogensyuu* and Late Middle Japanese literature.

Key words: *to omou*, *to zonzuru*, verbs of cognition, politeness, Late Middle Japanese